



よつば会だより

2017 年 1 月号

発行:NPO 法人

尾道こころネットよつば会事務局

尾道市 栗原東 2 丁目 17-86

TEL・FAX 0848-37-6600

新しい年を迎えて

尾道こころネットよつば会

理事長

谷口

憲

秋



明けましておめでとうございます。今年は鶏年です。鶏鳴という言葉があります。一番鶏が鳴く頃の意味ですが、転じて夜明けの意味にも使われます。この年が私たち精神障害者の家族にとって、希望を伴った夜明けの年になることを祈りたいと思います。

さて、去年のよつば会の活動を振り返りながら、今年への抱負を述べてみます。去年の活動は、総じてマンネリ化してきていると言わなければならないでしょう。よつば会だよりの活動報告を見ても、どの月も「当事者との交流会」と「家族教室」または「家族の SST」となっていて変化がありません。新たな活動への取り組みが、全くと言っていいほど無いままに1年が過ぎていきます。そこで今年は、このマンネリ化の打破に組みたいと思っています。尾道市の精神障害福祉を少しでも向上させるために、取り組む必要のあることは、いくつもあります。行政とのつながりを持つこと、精神障害者施設との連携を深めること、講演会などの啓蒙活動を行っていくこと、個々の精神障害者およびその家族の課題を把握し、その解決に向けての取り組みに努力することなどです。よつば会の会員も高齢化が進み、マンネリ化打破のエネルギーも大きくはありませんが、子どもたちのために、また、家族のために、今できることに少しでも取り組みを進めていこうという思いです。動き出すためには、会員の皆さんの後押しが力になります。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。



家族の力で ACT の立ち上げを



「みんなねっと」誌の昨年11月・12月号に、地域家族会の熱意が ACT(アクト)の立ち上げを実現させたという特集記事が掲載されました。その内容を少しばかり紹介します。その前に ACT とはどのようなものかに触れておきます。ACT はアメリカで始まった取り組みで、Assertive Community Treatment(日本では包括的地域生活支援プログラムと訳されている)の頭文字を取って ACT と略称されています。その取り組みは、重い精神障害を抱えることで、何度も入院を繰り返したり、家に引きこもっている人などに、精神科医、看護師、作業療法士、精神保健福祉士、ピアスタッフなどの多職種スタッフが、チームを組んで自宅を訪問し、訪問診療、訪問看護、相談支援、生活訓練、就労移行支援、居宅介護などを包括的に行うものです。また、家族支援も視野に入っています。重い精神障害で社会資源とつながることもできずに自宅で生活している当事者やその家族にとって、ACT を利用できることは、大いに望ましいことです。しかし、住んでいる地域に ACT がなければ利用できません。ACT が注目されだしてから10年以上は経っているのですが、その普及はまだ多くはありません。ACT に取り組もうという熱意を持った精神科医があまりいないことや、経営的に成り立たせることがかなり難しいことなどからだと思います。「みんなねっと」誌の記事は、ACT が必要だという強い気持ちを持った家族が、周囲の多くの理解者・支援者とのつながりを作りながら、ACT の立ち上げを実現したという報告です。家族が ACT のスタッフになるのではなく、家族の熱意に共感した人々が立ち上げたということですが、願って止まない ACT を家族の力で実現させたことに心をうたれました。尾道でも ACT をと叫びたいのですが、簡単なことではありません。その前によつば会の活動を幅広いものにしていく努力が必要でしょう。

1 2 月の活動報告

- 05日 障害者週間尾道大会 (総合福祉センター)
- 06日 家族の SST (市民センターむかいしま)
- 11日 当事者との交流会 (サロンよつば)

1 月の活動予定

- 08日(日) 当事者との交流会 (サロンよつば)
 - 25日(水) よつば会家族教室 (市民センターむかいしま)
- *「サロンよつば」は週2日、水・土曜日にオープンしています。
AM10:00~PM3:00 です。気軽にお越しください。



～意見発表と講演に感動するも少ない参加者が～ 「障害者週間」尾道福祉大会に参加して



第23回「障害者週間」尾道福祉大会が、12月5日に開催されました。大会はアトラクションとしてのフラダンスから始まりました。演技をしたのは**【ポラニエ尾道】**スペシャルオリンピックス尾道フラダンスチームのみなさんでした。3曲の演技で、その最後の曲、「見上げてごらん夜の星を」聞いていて、「ささやかなしあわせを祈っている」という歌詞に思いを込めていると感じました。その後、市長挨拶、市議会議長の祝辞があり、続いて当事者の意見発表。発表者は**「尾道さつき会・ワークスさつき」**の向井寛さんで、発表の要旨は次の通りです。

『バイク事故で3ヶ月意識のない状態になり、何とか命は助かりましたが、体のマヒで車椅子の生活となりました。2年後大学に復帰、母と一緒に通学でした。事故の後遺症で人との会話に恐怖心抱くような中、何とか大学を卒業、その後機能回復に勤めました。現在ワークスさつきで介護用ベッドや車椅子の手入れの作業をしています。手のふるえでネジの回し方や作業工具がうまく使えなかったのですが、日々頑張っただんだんできるようになり、次第に自信も持てるようになりました。自宅での生活の中でもリハビリをしています。新聞を書き写したり、歩行訓練をしています。また、発語がはっきり出来るように大きな声を出す訓練、多くの人と話すことを恐れないように努力しています』



向井さんは、話し方はゆっくりながら最後まで力強い声で話終え、大きな拍手を浴びていました。

そのあとは大会のメインの講演でした。講師は**「日本初義手の看護師で、北京・ロンドンパラリンピック競泳日本代表」**の伊藤真波さんで、演題は「あきらめない心」でした。伊藤さんは看護学校に通っていた20歳のときに交通事故に遭い、右手を完全になくしてしまいました。それでも看護師専用の義手を作り専門学校に復学、国家試験に合格して現在看護師として働いています。講演では生い立ちから事故のときの状況、右腕を切断するときの悲痛な思い、看護師になってからも「今、嫌なことから逃げていたら前に進めない」と考え、水泳を再開したことなどを話されました。話し方は明るく、笑顔もすてきで、大変な状況から、よくぞここまで強く立ち直ったものだと驚かされる講演でした。最後に伊藤さんのバイオリン演奏がありました。左手にバイオリンを持ち、右肩に取り付けたバイオリン演奏用の義手を使って弓を操作しての演奏でした。右肩の肩甲骨と筋肉を使って義手を動かすのだと説明していました。見事な演奏でした。



最後は大会宣言です、**「尾道のぞみ会・やまと」**の長濱伸也さんが堂々と宣言文を読み上げました。彼とはその後会う機会があり、「大会宣言、落ち着いていたね」と声をかけると、「いいや、緊張した」と言葉を返しながら、にっこり笑っていました。



かくして大会は終わりました。フラダンス、意見発表、講演のいずれもが、いい内容でした。しかし、残念なことがありました。それは今回も参加者が少なかったことです。前回も少なかったのですが、今回はさらに少ない参加者だったように思います。今年7月に、障害者支援施設「神奈川県立津久井やまゆり園」において、入所支援を利用する19人が命を奪われ20人が負傷するという、未曾有の事件が発生しました。事件の容疑者は、障害のある人の命や尊厳を否定するような言辭を口にしてしていると伝えられています。今回の尾道大会でも、障害者である向井さんや伊藤さんが、懸命に頑張りながら、そして一人の価値ある人間としての存在を作りながら、生きている姿に心を打たれました。その姿をより多くの尾道市民に知ってもらいたかったのです。来年度の福祉大会の準備段階で、市の担当者にこのことを強く訴えていきたいと考えています。(N.T)